

Q1 (池本) :

(『ちょうちょうの舞踏会とバッタの宴会』について)

リード部分にある、「ヴィクトリア朝の著名な奴隷制度廃止運動家」は、ウィリアム・ロスコーのことだと解釈しました。ですが、ウィリアム・ロスコーは 1753 年に生まれて 1831 年に亡くなっており、ヴィクトリア朝は 1837 年から 1901 年です。ウィリアム・ロスコーはヴィクトリア朝の人物ではないと思います。この問題についてご意見をうかがえますか。

A1 (ソルター) :

わたしは、ロスコーのことをヴィクトリア朝の人物だといったつもりはありません。ロスコーは、リージェンシー (1811-1820 年) かジョージ王朝 (1714-1830 年) の人物だと思います。

Q2 (池本) :

『ちょうちょうの舞踏会とバッタの宴会』原文 140 ページの最後の段落に、ロスコーの存命中、彼の物語詩の続編が 2 つ出版されたとあります。ですが、そのあとに続く文章には 3 つの作品——『くじゃく家の祝宴』 (1807 年)、『The Lion's Masquerade ライオンの仮装舞踏会』 (1807 年)、『The Elephant's Ball and Grand Fête Champetre ゾウの舞踏会と田舎の祝宴』 (1807 年) ——が紹介されています。2 つというのはまちがいで、正しいのは 3 つでしょうか？

A2 (ソルター) :

はい、続編は 3 つです。『British women poets of the Romantic era ロマン派のイギリスの女性詩人』 (ポーラ・R・フェルドマン編によるアンソロジー、2000 年、メリーランド州、ボルティモア、ジョーンズ・ホプキンス大学出版局、ISBN 0801866405) の 226 ページによると、『The Lion's Masquerade ライオンの仮装舞踏会』と『The Elephant's Ball and Grand Fête Champetre ゾウの舞踏会と田舎の祝宴』は 1 冊にまとまっていますので、『くじゃく家の祝宴』と合わせて 2 つと数えました。このふたつが別々の作品だとは気づきませんでした。

※池本申し送り：上で述べられている本は以下の本だと思います（出版された年が、著者が述べている 2000 年ではないのですが）

[CiNii 図書 - British women poets of the romantic era : an anthology](#)

[Amazon.com: British Women Poets of the Romantic Era: An Anthology \(9780801866401\):](#)

[Feldman, Paula R.: Books](#)

Q3 (池本) :

同じく、『ちょうちょうの舞踏会とバッタの宴会』原文 140 ページの最後の段落で、『くじやく家の祝宴』（1807 年）と、『The Lion's Masquerade ライオンの仮装舞踏会』（1807 年）はキャサリン・アン・ドーセットの作品だと確認できましたが、『The Elephant's Ball and Grand Fête Champetre ゾウの舞踏会と田舎の祝宴』（1807 年）はドーセットの作品だとはっきりとは確認できませんでした。『The Elephant's Ball and Grand Fête Champetre ゾウの舞踏会と田舎の祝宴』はドーセットの作品ですか。

A3 (ソルター) :

こちらにアクセスすれば、ドーセットが『The Elephant's Ball and Grand Fête Champetre ゾウの舞踏会と田舎の祝宴』の数人いる作者のうちのひとりだと確認できます。

<https://www.worldcat.org/title/elephants-ball-and-grand-fete-champetre-intended-as-a-companion-to-those-much-admired-pieces-the-butterflys-ball-and-the-peacock-at-home-illustrated-with-elegant-engravings/oclc/881551552>

Q4 (池本) :

（『怪物はささやく』について）

リード部分で、the circumstances of its conception は、この作品の原案を考えたのは、シヴォーン・ダウドだが、ダウドはがんで亡くなったので、ネスが変わりに執筆を引き継いだという特殊な事情だと解釈しました。この解釈で合っていますか？

A4 (ソルター) :

わたしの手もとにあるテキストには、以下のように記載されています：『怪物はささやく』のアイディアは、2007年、ダウドががんで病床に伏せているときに生まれた。ネスは、ストーリーはすべて自分の思いどおりに書くという条件で未完の遺作を引き継ぐことに同意。それを執筆していたときのことをネスはこう語っている。「まるでダウドとふたりきりで会話をしているようだったが、話していたのはほとんどぼくだ。『なんだか、ふたりで悪いことをしてるみたいだよね』と」

Q5 (笹山) :

(『若草物語』について)

原文 25 ページに、エイモス・ブロンソン・オルコットの「女性に対する態度全般」が妻と娘たちの絆を強めたと書かれています。これは、オルコット氏が女性を軽視し、家でもいばっていたということですか？ ノーマ・ジョンソンの『ルイザ 若草物語を生きたひと』を読んだところ、オルコット氏は情熱的な理想主義者で、自らの高邁な理想を実現することを家族より優先させたという印象を受けました。それは相手が娘ではなく息子でも、同じだったのではないかと思います。

A5 (ソルター) :

「妻や娘をないがしろにしがちだった」と書いたほうがよかったですね。

Q6 (笹山) :

(『鉄道きょうだい』について)

原書 40 ページの「エドワード時代の ET」という表現に興味を持ちました。これはイギリスの読者の多くが持っているイメージなのですか？ それともだれか有名な人の表現でしょうか？

A6 (ソルター) :

エドワード時代の ET という言葉は、編集者が考えたキャプションだと思います。わたしのもともとの原稿には書いていませんでした。

Q7 (笹山) :

(『鉄道きょうだい』について)

原書 41 ページに『鉄道きょうだい』には当時のできごとが描かれているとあり、その例として「1904 年から 1905 年にかけてのロシアと中国の戦争」が挙げられています。これは中国を戦場とした日露戦争のことでしょうか？ 日本の読者としては、気になると思います。

A7 (ソルター) :

これは誤りで、弁解の余地はありません。たしかに日露戦争のことです。

Q8 (佐々木) :

(『おやすみなさいおつきさま』について)

マーガレット・ワイズ・ブラウンとクレメント・ハードの出会いについて、ひとつ質問したいことがあります。この点に関する資料が見つけれなかったのですが、クレメント・ハードはバンク・ストリート付属校で教えていましたか？

A8 (ソルター) :

ウィキペディアでは「イーディス・サッチャー・ハードはラドクリフ女子大を卒業後、バンク・ストリート教育大学で学び、そこで初めてクレメント・ハードやマーガレット・ワイズ・ブラウンに出会いました」と書かれていました。これにより、わたしは行き過ぎた解釈をしたのかもしれませんが、『ワシントン・ポスト』紙の記事には、こう載っていました。「イーディス・ハード（愛称はポージー）とマーガレット（ブラウニー）はバンク・ストリート教育大学の同級生で、何冊もの絵本を共作しました」したがって、おそらく、ブラウンがバンク・ストリート教育大学で出会ったのはイーディスだけだったのでしょう。（サッチャーとハードは 1939 年に結婚し、そのときにはすでにブラウンは W・R・ス

コット社の編集者でした。)

https://en.wikipedia.org/wiki/Edith_Thacher_Hurd

<https://www.washingtonpost.com/archive/entertainment/books/1998/05/03/home-is-where-the-stories-are/84069005-ed5c-4a21-8231-db3671aded94/>

Q9 (中西) :

(『たのしい川べ』について)

『たのしい川べ』の章に、ケネス・グレアムがオックスフォードのセント・エドモンズ・スクールに入学した (原文 : “Grahame grew up around the river Thames, first in Cookham Dean, Berkshire, then at St. Edmunds School in Oxford.”) とありましたが、セント・エドワーズ・スクールの間違いではないでしょうか。ご確認くださいませでしょうか。

A9 (ソルター) :

そうです。セント・エドワーズ・スクールでした。

Q10 (中西) :

(『ぞうのババール』について)

『ぞうのババール』の章の“For the elephant it is urban civilization; for the reader it’s the jungle, the killing of Babar’s parents by a big game hunter, parenthood and the notions of palatial monarchy and an ordered society beyond the family home.”の箇所が読み取れませんでした。この文章は、ババールが家族だけでなく、ぞうの王国も統治する立場になったという意味でしょうか。

A10 (ソルター) :

確かに、難しいですね。わたしは次の意味で書きました。"for the reader it’s the jungle, the killing of Babar’s parents by a big game hunter, the idea of parenthood, and the notion of different levels of society beyond the family home."

※中西申し送り：丁寧にお答えいただき、最終的には次のように訳しました。

「その場所とは、ババールにとっては文明化された都市だが、読者にとってはジャングルだ。そこは、大きな獲物をねらうハンターにババールが両親を殺された地である。読者は物語を通して、親になるという考え方に触れ、また家庭だけでなくさまざまな社会があることに気づく。」

Q11 (中西) :

(『ラクダ飛行部隊がやってくる』について)

『ラクダ飛行部隊がやってくる』の章で、「3 日間で、3 度墜落事故にあっているのだ——1 度目は海に、2 度目は砂丘に、3 度目は航空兵仲間の宿舎の裏口に墜落した。」(原文：“In one three-day period he crashed three planes – one into the sea, one into sand dunes, and one into the back door of a fellow officer’s lodging.”) とありましたが、3 日間で、このような大きな事故が連続で起こるなんてことがあるのか不思議に思いました。そこで、“In one three-day period”は、“in a short period of time”（「短期間で」）と訳そうと思うのですが、問題ないでしょうか。

A11 (ソルター) :

[https://en.wikipedia.org/wiki/W. E. Johns](https://en.wikipedia.org/wiki/W._E._Johns)を確認したところ、“The aircraft of the time were very unreliable and he wrote off three planes in three days through engine failure – crashing into the sea, then the sand, and then through a fellow officer's back door.”（「当時の航空機は非常に信頼性が低く、W・E・ジョンズは3日間でエンジンが故障した3機の飛行機について記している。1機目は海へ、2機目は砂丘へ、3機目は航空兵仲間の宿舎の裏口に墜落した。」）との記載がありました。

Q12 (中西) :

(『床下の小人たち』について)

『床下の小人たち』の章に、“It was finally finished and in 1969.”（「映画がなんとか完成

したのは1969年のことだった」p.144)とありましたが、andは原文の誤りでお間違えないでしょうか。

A12 (ソルター) :

わたしのテキストには、"It was finally made in 1969."とあります。andはとっておいてください。

Q13 (中西) :

(『ミスター・ティックル (コチョコチョコくん)』について)

『ミスター・ティックル (コチョコチョコくん)』の章に、*Walter Worm*という作品について触れられていましたが(原文: "Roger Hargreaves wrote other books too, including series about Walter Worm and John Mouse. ")、ロジャー・ハーグリーブスの作品のなかに、*Walter Worm*というシリーズ作品は見つけれませんでした。正しくは *Walter the Worm* (『ミミズのウォルター』)ではないでしょうか。

A13 (ソルター) :

わたしが参考にした資料には、*Walter Worm*という名前のキャラクターがでてくるシリーズ作品について書かれていました。ですが、確認したところ、*Walter the Worm*というタイトルで、第1作目しか出版されていないようで、*Walter Worm*はシリーズ作品にはならなかったようですね。ウォルターは、わたしの作品からも外すべきだったかな。

Q14 (市村) :

(『エドワード・リアのナンセンス詩集成』について)

この章で『*The Owl and the Pussycat* フクロウくんとネコちゃん』には、おそらくリアの造語で一番よく知られている「*the runcible spoon* (先割れスプーン)」が出てくる。この造語「ランシブル (*runcible*)」は、なんともぴったりの言葉で、どうしてもっと早く考えつかなかったのだろうかと思わせるほどだ。(原文: "The Owl and the Pussycat" contains probably his most famous invention – the runcible spoon. 'Runcible' is such a satisfying

word that one wonders why it hadn't been invented earlier.) と書かれています。リアはこの言葉を、現在の定義よりもっと広い意味を持つ言葉として使用していたという事は理解しましたが、ソルターさんが「なんともぴったりの言葉」とここで書かれているのは、「runcible」という言葉が先割れスプーンの形をよく言い表しているからでしょうか？ それとも、このスプーン以外にも、さまざまなものを言い表すことのできる便利な形容詞だからでしょうか？

A14 (ソルター) :

なぜかはわかりませんが、「runcible」という言葉をきくと、スープスプーンですくったグレイビーソースを思い浮かべてしまうんです！ それに、この言葉は“spoon”と相性バッチリに聞こえます—やわらかい“c”の音と“s”の音、“b”の音とやわらかい“p”の音が相性抜群なのです。この言葉のほかの用法は、わたしには思いつきません。これをあなたがどう日本語に翻訳して伝えるのか、それは神のみぞ知るところです。

※市村申し送り：上記の引用箇所中の“such a satisfying word”は、最終的には「なんともぴったりの形容詞」として、言葉を少々補って訳しています。

Q15 (市村) :

(『宝島』について)

「サー・ウォルター・スコットは、スティーヴンソンの祖父に同行して同じように各地を巡り、その経験をもとにして1822年に『The Pirate 海賊』という小説を出版している」というのは、とても興味深い話だと思いました。ただ、わたしが調べた限りでは、この情報の出典がみつからなかったため、参照した資料を教えてくださいと幸いです。

A15 (ソルター) :

<http://www.walterscott.lib.ed.ac.uk/works/novels/pirate.html> は、北方灯台委員会 (the Northern Lighthouse Commissioners) との船旅について言及しています (訳注：北方灯台委員会は、スコットランドの灯台を管理するための委員会。スティーヴンソンの祖父であり、灯台建築技師であったロバート・スティーヴンソンは、北方灯台委員会の技師を務めてい

た)。 [http://fyca.org.uk/ ArchiveOfFYCA/Cruising/Cruising%20Tales/Scott/scott.htm](http://fyca.org.uk/ArchiveOfFYCA/Cruising/Cruising%20Tales/Scott/scott.htm) では、ロバート・スティーヴンソンの名前が、旅の一行のひとりとして挙げられています。

Q16 (市村) :

(〈タンタンの冒険〉シリーズについて)

「…エルジェは物語の中で時事的な事件を取り上げるのをやめ、登場人物たちに重きを置いたストーリーを描くことに方向転換した。そうすることで、第一次世界大戦 (World War I) 中もナチス占領下のベルギーで連載を続けようとしたのだ」(原文: “...Hergé moved away from political commentary towards character-driven stories in order to be able to continue to work during the Nazi occupation of Belgium in World War I.”) とあります。これは、「第二次世界大戦 (World War II)」のことでしょうか？

A16 (ソルター) :

「World War Two」から「World War II」に変換する際に起きたタイプミスだと思います。

Q17 (市村) :

(『おばけやしき』について)

「歯車を回し、つまみを引っ張り、格子を外し、ドアというドアを開くことができる。」(原文: “there are wheels to spin, tabs to pull, lattices to uncover and many, many doors to open.”) と書かれていますが、この本の中で“lattice (格子、格子窓)”にあたる仕掛けをみつけることができませんでした。該当箇所を教えてくださいませんか？

A17 (ソルター) :

おそらく、“lattice (格子、格子窓)”という言葉は適切ではなかったかもしれません。寝室の場面で、ベッドの奥のカーテンからお化けが現れる仕掛けのことを指していると思います。垂直に切れ目を入れた紙とななめに切れ目を入れた紙を組み合わせたような仕掛けのことです。

Q18 (安納) :

(ソルター氏ご本人について)

チームで翻訳作業中、2点ほど、ソルターさんにおききしてみたいことがありました。と申しますのは、自分(質問者)は子どものころに無形のギフトをもらった——つまり、両親や祖父母のおかげで、物語の世界にどっぷりとひたる楽しさを知れたことに、本書を翻訳しながら、あらためて気づいたからです。その記憶は、暗闇に浮かぶロウソクの光のように、心温まるものでした。そんなふうに思えたのは、そのころ日本では新型コロナウイルス感染拡大防止対策として外出禁止令が(2020年3月から6月末まで)でていたからでした。

質問の前に、ソルターさんにここで、お伝えしたいことがあります。「混乱の時代」、「歴史的転換点」などといわれるこの世界的パンデミックのときに、幼少期を振り返る機会を与えてくださり、ありがとうございます。翻訳者/ライターのはしぐれとなるにいたしました、すべてのご縁に感謝の気持ちでいっぱいです。こんなに素敵な本をこのチームで、もうすぐ日本の読者に(若い人、それに、もう若くない人にも!)届けられるなんて、光栄です。

さて、本書ではソルターさんの、思い入れをさしはさまない客観的な文体が印象的でした。よろしければ、実際に起きたことや史実を紹介するときのソルターさんの文章スタイルに影響を与えた本、または作家を教えてください(子どもの本以外でも結構です)。

A18 (ソルター) :

子どものころ、長い休みには必ず、ためになること、それもないが歴史にちなんだことをやらされました。ヨーロッパの教会やお城巡りをし、そのあとレクチャーを聴かされる、みたいな感じで。今でも父を恨んでいるのは、ある年の夏休み中ずっと、歴史の本を読めと押しつけられ、外で遊ばせてもらえなかったこと。ですから当然、大人になるまで、歴史小説やノンフィクションの歴史物を自分から読む気にはなれなかった。子ども時代の例外は、ひとつだけ。Jackdawの歴史シリーズです。そこにでてくる古文書の写しには、ワクワクしました。『世界に読み継がれる子どもの本100』で子どものころのお気に入りには『宝島』(道徳的にはどうかと思われる父親像)、『若草の祈り』(父の不在)、『げんきなマドレーヌ』(韻の楽しさ)、『ぞうのババール』(イラストの味わい)、『エーミールと探偵たち』(子どもたち

の賢さ) です。

Q19 (安納) :

(ソルター氏ご本人について)

ネット検索していたら、ソルターさんの昔のブログ『Tall tales from the Trees (訳注: Tall tales は英語で「大ぼら話」)』をみつけました。記事をいくつかランダムに選び、興味深く読みました。ソルターさんの「一族の歴史」へのこだわり、それと、それをすっきりと文章で紹介しながら、わかりやすい資料(古い直筆の手紙や肖像画の写真など)を添え、読者を楽しませる構成の巧みさに、感銘を受けました。

あれこれクリックして読んだなかで、最も印象に残った記事は 2015 年の、焚き火の夜にふとよみがえった、お父さまの思い出の話です。とくに最後の 1 行が、心に響きました。「父が他界して初めて、というだけではなく、40 年の人生で初めて、自分の心の声に気づいた——『パパに会いたい』」。わたくし(質問者)自身にも、「理解できない」自分の父との軋轢があります(こじれて、和解できずにいます。悲しいことですが)。

そこで、ふたつ目の質問です(過去記事ですすでにお書きでしたら、ひらにお許してください)。ご両親のどちらかが、歴史本好きだったのでしょうか? お父さまは家系図の話を「忌み嫌った」とブログに書かれていました。ですが、お父さまは「歴史」や、物事(や人)の来歴を紹介する本をどれも、「忌み嫌った」のでしょうか? それとも、ソルターさんの歴史へのこだわりは、数世紀前から先祖代々、受け継がれたものなののでしょうか?

A19 (ソルター) :

父の歴史熱は、間違いなくうつりました。子どものころ、あんな目にあつたのに! 今では執筆活動すべての原点に、歴史があります。わたしたちは、なぜ、ここにいるのか? という疑問です。父が家系図を毛嫌いだした理由は、わかりませんが、わたしが家系図にひかれるのは、一族のことや「自分はなぜここにいるのか」をたどるとき、父をうまく避けられるからでしょう。昔から、うちの一族は文学と教育を大切にしてきました。過去記事をブログの枠を越えて紹介しようとしています。少なくとも 7 代前からの先祖について知りたいとい

う、ほとんど根源的な欲求をふくらませ、『Tall Tales from the Trees』を本にしたいのです。タイトルは『In My Father's Good Books』。この本に興味を持ってくれそうな出版社をご存知でしたら、ぜひご紹介を！

※安納申し送り：

コリン・ソルターさんの個人ブログ

Tall Tales from the Trees:

<http://talldatalesfromthetrees.blogspot.com>